

道の駅

特集

ゲレンデと遠軽とオホーツクの魅力を発信する道の駅



道の駅 遠軽 森のオホーツクの紹介

遠軽町経済部商工観光課 主任 安西 一 樹

1. 交通の要衝として

オホーツク地域の内陸に位置し、広大な森林を抱える北海道遠軽町は、古くから旧名寄線と石北線の接続駅として栄え、人とモノが集まる交通の要衝として発展してきました。2005年(平成17年)10月に生田原町・遠軽町・丸瀬布町・白滝村の4町村の合併により新たな「遠軽町」として誕生し、2021年(令和3年)7月末現在、人口は約19,100人、東西47km、南北46kmにわたる面積1,332.45km²の緑豊かなまちです。



図-1 遠軽町位置図

北海道で125番目となる道の駅「遠軽 森のオホーツク」は、旭川・紋別自動車道 丸瀬布遠軽道路の開通に合わせ、遠軽ICに隣接する場所に2019年(令和元年)12月、北海道で初めてのスキー場を併設する道の駅としてオープンしました。また、「遠軽 森のオホーツク」は、地域のゲートウェイ機能を持つ道の駅として整備され、遠軽町の観光施設や飲食店などの案内をはじめ、近隣の市町村の観光情報の発信などを行っています。さらに広大な敷地を生かし、災害時には防災拠点としての役割を果たせるように整備しています。

2. 「ゲレンデと遠軽とオホーツクの魅力を発信する道の駅」

これは、遠軽ICに隣接したスキー場周辺の整備を進めるにあたり、地域の意向を反映した活力のある施設とするために、道の駅の整備に向けた計画案の策定を行う組織である「遠軽IC道の駅検討協議会」において設定したコンセプトです。

札幌・旭川方面から見るとオホーツク圏への玄関口となる立地特性を活かし、地域の個性を演出する



図-2 まちのシンボル「瞰望岩(がんぼういわ)」



図-3 道の駅外観

道の駅づくりを進めることを表し、このコンセプトのもと、スキー場とロッジ機能、充実したトイレ機能、オホーツクの産品を網羅した物販・直売機能、地域の特徴を出した飲食機能を柱として整備し、今後もこれに則った運営を進めます。

3. 施設概要

所在地：遠軽町野上 150 番地 1

敷地面積：約 21,000m²

建築面積：約 1,035m²

延床面積：約 1,620m²

(1F 約 845m²、2F 約 775m²)

規模構造：地上 2 階建 RC 造

駐車場：191 台(大型 9 台、小型 178 台、身障者・妊婦用 4 台、二輪車用 10 台、EV 充電器 1 台)

※臨時駐車場あり

トイレ：41 器(男(大)7 器・(小)14 器、女 19 器、多目的 1 器)

指定管理者：一般社団法人えんがる町観光協会

4. 駅名の由来とロゴマーク

「遠軽 森のオホーツク」は、全国から公募した 611 作品の中から遠軽 IC 道の駅検討協議会が選考した駅名です。

オホーツクと言えば海のイメージが強くある中で、海に流れ込む川の始まりは山であり、オホーツク管内の内陸に位置し広大な森林を抱える遠軽町は、豊かなオホーツクを創り出す「森のオホーツク」と言えるとともに、隣接するえんがるロックバレースキー場と一体となり、年間通して楽しめる森をステージとしたテーマパークと考え、地域の魅力溢れる飲食や体験、オホーツクの玄関口として観光情報などを提供することで、「ゲレンデと遠軽とオホーツクの魅力を発信する道の駅」のコンセプトを体現することを目指しています。

また、森の緑色をベースに五円玉の形をしたロゴマークは、「ご縁がある」→「えんがある」→「遠軽」と連想させるとともに、白いノルディック調の枝葉のモチーフは、木やオホーツクのイメージを強調して

います。このロゴマークを施設内の什器や壁、商品パッケージやスタッフのユニホームなどに施すことで、ブランドイメージの向上や、施設全体の一体感の醸成を図ります。

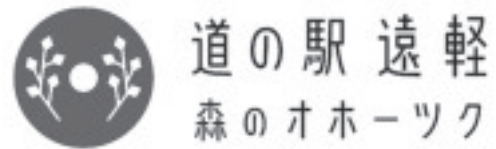


図-4 ロゴマーク

5. スキー場とのコラボレーション

「遠軽 森のオホーツク」の最大の特徴は、地域に根差し、40 年以上の歴史を持つ「えんがるロックバレースキー場」と一体となっている点です。スキー場の雪質や斜面は、プロのスキー選手からも折り紙付きで、アルペンスキーの大陸別大会「FIS フェアリーカップ」が開催されるなど、国際大会の会場にもなっています。

施設は、2 階のロッジ部分からスキー場のゲレンデへ直接アクセスできる RC 造 2 階建の構造で建てられており、晴れた日には、スキー場の山頂からオホーツク海の流氷も見ることができます。

また、これまでもアルペン競技の合宿や、学校のスキー授業などにも利用されてきた中で、道の駅の整備に伴い、スキー場の設備も大幅にリニューアルを実施しました。ペアリフトをはじめ、ナイター照明や人工降雪機の更新、ゲレンデの拡幅などにより、これまで以上に利用しやすく、子どもから高齢者まで、初心者から上級者まで多くの方が楽しめるスキー場となっています。



図-5 道の駅 2 階・ロッジ部分



図-6 ロックバレースキー場山頂からの景色

そして、隣接する足湯設備「森のオホーツク足湯」は、湯上り後も温かさが持続する高濃度の人工炭酸泉を使用しており、スキーヤーやスノーボーダー、ドライバーにも喜ばれています。



図-7 森のオホーツク足湯

6. 魅力的な飲食・物販を目指して

1階の特産品販売施設では、地元企業による道の駅限定のスイーツや加工品など、遠軽・オホーツクの産品を中心に取りそろえており、オホーツク産の木材を使った経木(きょうぎ)わっぱのギフトボックスに、お好みで商品を詰め合わせる「オリジナルのギフト」づくりが楽しめます。

同じく1階のフードコートでは、特産の「白滝じゃが」を使った商品を提供しており、野菜たっぷりりで食べ応えのある「1日分の野菜カレー」やSNS映えする「クリーム・デ・ポテト」、町内の牧場「ノルディックファーム」と共同開発した、ゴマの香りと

黒曜石のような漆黒の輝きが特徴の「ジオソフト」などが評判です。



図-8 特産品販売施設「select forêt」



図-9 経木わっぱのギフトボックス



図-10 フードコート「ENGARU TERRACE」



図-11 1日分の野菜カレー



図-12 ジオソフト

7. 夏場のアクティビティ

夏場には広大な森やゲレンデを活用した各種アクティビティが楽しめます。

2020年(令和2年)8月には、木の上に足場を組んでワイヤー、ロープ、はしごなどのアトラクションで木から木へ渡り歩き、空中散歩を楽しめる「ツ



図-13 ツリートレッキング

リートレッキング」が、えんがるロックバレースキー場の林間コース横の林地にオープンしました。

古くから林業で栄えた遠軽町に誕生した当施設は、「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みである「木育」の考え方を大切に、地域の個性を生かした木の文化を育んでいきたいと考えています。

2021年(令和3年)6月には、北海道内でも珍しい、雪がない時期でもスキーやスノーボードを滑ることができる、人工マットの「サマーゲレンデ」がオープンしました。特殊なポリエチレン素材でできた「ピスラボ」と呼ばれる人工マットは、限りなく雪に近い滑走感覚が味わえると、スキー・スノーボード競技者や愛好家から評判で、オフシーズンのトレーニングにも最適です。専用の板やブーツ、ポール等のレンタル用品も充実していますので、手ぶらでもお越しいただけます。



図-14 サマーゲレンデ

2021年(令和3年)8月には、空中に張ったワイヤーロープを専用の滑車(トロリー)で猛スピードで滑空する「ジップライン」がオープンしました。

安全器具(ハーネス)を装着し、リフトで上ったえんがるロックバレースキー場の山頂から、西側の山(通称「鹿山」)を經由して、ゲレンデを横切る形で山麓まで滑り降ります。A・Bの2つのラインの合計は1,135mで、1つのラインの長さが500mを超える施設は北海道で唯一です。

また、最速70km/hのスピードと、最大地上高50mの高さ、スタートとゴールの高低差250mは北海道一かつ国内でもトップクラス。そして、何と

言っても日本一の最大 25%の急勾配は、スタート地点に立てば足がすくむこと間違いなしで、最高の景色と極上のスリルは一度体験すれば病みつきです。



図-15 ジップライン「森のOWL」Aライン



図-16 ジップライン「森のOWL」Bライン

この他にも、伸縮性のある頑丈なゴムとトランポリンを使い、約 5m の高さまでジャンプできる「バンジートランポリン」や、愛犬と楽しめる「ドッグラン」、体を前後に傾けるだけで簡単に加速や減速することができる新感覚の乗り物「インモーション」などがあり、季節を跨いだ集客が図られることで、地域の賑わいが生まれるとともに、これまでは冬季のみだったスキー場スタッフの通年雇用が可能となり、雇用創出などの面からも地域活性化が期待されています。



図-17 バンジートランポリン



図-18 インモーション

8. 災害に強い道の駅

その他にも、「遠軽 森のオホーツク」は、災害の対応にも力を入れています。この地域では大規模な風雪害により、道路網が寸断して車が立ち往生するケースが多く発生していることもあり、遠軽町と北海道開発局は令和元年 12 月、災害発生時における防災拠点化に関する協定を締結し、地方自治体と道路管理者が連携・協力した中で、道の駅の災害対応力や防災機能を高めています。

災害時には 24 時間利用を含めて営業時間を延長し、情報の収集や提供、駅構内に備えている資機材の提供などを行うほか、ロッジをはじめとする収容スペースに避難者を受け入れる予定であり、オホーツクの玄関口として、地域が被災した場合には広域支援拠点として活用する方針です。

9. 今後の展望

「遠軽 森のオホーツク」は 2019 年(令和元年)12月のオープンから、2021年(令和3年)7月末までに 80 万人を超える多くのお客様にお越しいただきました。

新型コロナウイルス流行の影響を受けながらも、これまで町内になかった形態の店舗や品揃えによるリピーターの確保や、スキー・スノーボードをはじめ、屋外アクティビティの需要の高まりから新たな人流が生まれ、地域に賑わいをもたらしています。

今後も、この道の駅とスキー場を中心に、様々な体験や地域の食・文化の発信を行う中で、オホーツク圏の玄関口となる地域活性化の拠点として、街のにぎわいが創出され、地域の観光振興や情報発信に関する相乗効果が生まれることを期待しています。



図-19 太陽の丘えんがる公園 虹のひろば コスモス園



図-20 ジップライン「森のOWL」ポスター

安西 一 樹(あんざい かずき)

遠軽町経済部商工観光課
主任

